

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 21 日現在

機関番号：37404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370469

研究課題名(和文)熊本方言アスペクトの再検討

研究課題名(英文)Reanalysis of Apect System used in Kumamoto Prefecture

研究代表者

畠山 真一 (Hatakeyama, Shinichi)

尚絅大学・文化言語学部・教授

研究者番号：20361587

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、熊本県内方言のアスペクト体系(スル形、シヨル形、シトル形によって構成される)の意味用法の現況を明らかにし、あわせて、西日本諸方言におけるシヨル形、古代語のり形および現代日本語のシテイル形の文法化の経路についてワリの存在動詞的性質から考察を行った。

本研究は、現代日本語のイルに見られる「静止状態維持」という特質がワリにも見られることに注目し、西日本諸方言におけるシヨル形、現代日本語のシテイル形が「静止状態を維持したまま動作を遂行する」ことを意味する用法から発達したと主張し、さらに、上代語のり形が、存在様態用法から確立していったという仮説を提示した。

研究成果の概要(英文)：The research investigated the current situation of aspect system used in Kumamoto Prefecture, which is a ternary system comprised of suru-forms, siyuru-forms, and sitoru-forms, and furthermore, proposed grammaticalization of siyuru-forms used in West Japan, renyou-forms + wori, used in Old Japanese, and siteiru-forms used in current Japanese.

The research focuses the usage "preservation of a static state," which is a core meaning of wori (witari), and proposes that grammaticalization of siyuru-forms, and renyo-forms+wori, siteiru-forms developed from this meaning.

Furthermore, this research proposes that ri-forms used in Old Japanese developed from "existence with manners" usage.

研究分野：言語学

キーワード：方言アスペクト 文法化

1. 研究開始当初の背景

西日本諸方言におけるアスペクト体系は、完成相(スル形・シタ形)、未完成相(シヨル形・シヨッタ形)、パーフェクト相(シトル形・シトッタ形)の三項対立型であると想定され、完成相の意味は共通語と同様であるが、未完成相は、限界未達成性(終了限界に至っていないこと)を表現し、パーフェクト相は限界達成性(終了限界を超えてしまっていること)を表現すると考えられてきた(工藤, 1995, 2004)。例えば、西日本諸方言のシヨル形においては、「ビール飲みヨル」で、「ビールを飲んでいる最中であること」、もしくは「ビールを飲む兆候の存在(飲もうとしている)」という「出来事が終了に到達していない」ことが表現され、シトル形においては、例えば、「窓が、開いとル」で「窓が開いて、その開放状態が継続している」という結果状態継続、もしくは「窓が開いた痕跡がある」というパーフェクトという「出来事の終了限界に到達した」ことが表現されると、基本的には、考えられている。さらに、工藤(2001a, 2004)以降、方言アスペクトのムード的な側面が、どのような意味変化(文法化)を経て獲得されてきたのかについても、研究が進められてきている。

若年層における熊本市内方言の使用に関する調査を行った畠山他(2013)によると、シヨル形は、「動作・変化の兆候」の読みを持たず、状態維持の用法を持たず、さらに感情・感覚を表現する動詞において観察されないという特質を持つと報告されている。

すなわち、若年層における熊本市内方言では、「ビール飲みヨル」によって、「ビールを飲む兆候の存在」を表現することはできないこと、および「ここに座りヨル」によって、「座っている状態の維持(座ったままでいる)」という状況が表現できないこと、そして、感情・思考動詞にはシヨル形が欠如しており、例えば、「信じる」といった思考動詞にはシヨル形の出現が見られないことが報告されている。

本研究は、畠山他(2013)で報告されている熊本市内方言のシヨル形について、「話し手による出来事成立過程の知覚(視覚・聴覚などによって)を示し、アスペクト・証拠性の融合形態である」という仮説を立て、その妥当性を検証することを目的として着手された。

2. 研究の目的

文が表現する命題がどの情報源をソースに持つかを表明する文法カテゴリーは、証拠性(evidentiality)と呼ばれる(Aikhenvald, 2004)。

証拠性研究の立場に立てば、前節で述べた仮説は、熊本市内方言のシヨル形が、アスペクトに限界未達成性の意味を保ちながら、Aikhenvald(2004)の言う、firsthand evidential(命題内容の直接知覚を示す証拠性表現)の意味を獲得していることを意味し

ており、アスペクトと証拠性との連関が認められる。

その一方で、熊本市内方言のシトル形に関しては、そのパーフェクトの用法は、工藤(2001a, 2004)が述べるように、non-firsthand evidential(命題内容を、間接な証拠によって手に入れたことを示す証拠性表現)と関係づけられるが、事態が完結した後の痕跡の存在という、限界達成の在り方の一つのヴァリエーションからnon-firsthandの意味が生じたと考えられる(Aikhenvald, 2004; de Haan, 2012)。

熊本県内諸方言の調査を元に、熊本県内諸方言のアスペクト体系の実態を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、インタビューによる方言調査によりデータを収集した。調査対象については、次のとおり。

- (1) a. 熊本市, 山鹿市, 阿蘇市, 八代市, 人吉市, 天草市において、老年層(60歳以上)、中年層(40代~50代)、青年層(20代~30代)、若年層(10代)の4世代にわたった対面調査を行い、熊本北部方言アスペクトの現状を調査する(各2名ずつ)。
- b. あわせて、自然発話も収集する。

収集されたデータにもとづき、熊本方言アスペクトに関して、証拠性、文法化の観点から理論を構築した。

4. 研究成果

本研究の成果は、次の3つの領域にまたがっている。

- (2) a. シヨル形の文法化の経路について
- b. 上代語のリ形について
- c. シテイル形式の文法化について

順に説明していく。

畠山(2016)は、上代語のヲリに関するデータ、そして熊本県北部に位置する山鹿市内で使用されている方言(以後山鹿方言)および高知県東部方言(以後高知東部方言)のアスペクト形式に関する調査に基づき、シヨル形の意味変化の経路において、「座る、立つ、寝る、止まる、並ぶ、もたれる、隠れる」といったある種の静止状態への変化を意味する動詞(以後態勢変化動詞)のシヨル形が示す「結果維持」の意味・用法がその出発点であったと主張した。

よく知られているように、西日本諸方言アスペクトは、スル形、シヨル形、シトル形の三項対立をなし、基本的にシヨル形は進行中の動作・変化を、シトル形は結果状態を表現することが知られている(工藤 1995, 2004)。

しかし、シヨル形・シトル形の意味・用法

はそれにとどまらない。例えば、西日本諸方言の1つである宇和島方言におけるシトル形の意味・用法は次のような広がりを見せている(工藤 1983, 1995)。

- (3) ショル形
 - a. 動作進行: ジョン, えさ, 食べヨルぜ(工藤 1983: 101)。
 - b. 変化進行: きのう, 庭でへびが死にヨッタ (工藤 1983: 102)。
 - c. 結果維持: どして年よりが立って, 子供が座りヨルの(工藤 1983: 113)。
 - d. 動作・変化の兆候: (戸棚から酒瓶を出しつつあるのを見て) また, お酒飲みヨル (工藤 1983:108)。
- (4) シトル形
 - a. 主体変化結果の残存: きのう, 庭にへびが死んどッタ (工藤 1983: 102)。
 - b. 客体変化結果の残存: あ, 先生が窓開ケトル (工藤 1983: 109)。
 - c. パーフェクト: あんた, さっき, おやつ食べトルやないの (工藤 1983: 115)。
 - d. 開始限界達成: きょうは波が荒いの, 子供ら泳いドル (工藤 1983: 104)

このような用法を持つ, ショル形とシトル形であるが, シトル形はその用法が安定しており, 現在まで知られている西日本諸方言においては基本的に(2a-d)のすべての用法が観察されるのに対し, ショル形については, 「動作・変化の兆候」用法および「結果維持」用法を持たない方言が数多く見られる。

畠山 (2016) で報告されている調査は, 宇和島方言や高知東部方言の中年層・老年層話者に観察されるショル形の「結果維持」の用法が, 熊本市内方言では完全に失われており, 山が方言および高知東部方言でも衰微しているということを示した。

また, 本研究は, ショル形の祖先と考えられる「連用形+ヲリ」が結果状態維持用法を持つことを報告した。

これらのデータを元に, 本論文では, ショルが静止状態維持を表すヲリから派生したという

議論および文法化の経路に関する一般的な議論をベースとして, 「結果維持用法」からショル形は発達してきたと主張した。

続いて, 上代語のリ形に関する研究結果について述べる。

畠山 (2017a) では, 上代語におけるリ形(いわゆる, 完了・存続の助動詞「リ」が動詞に接続した形式)の用法について, 万葉集のデータを元に考察をおこなった。

リ形は, 「動詞の連用形+存在動詞アリ」から発達したと一般に考えられており, 完了・存続を表現するとされている(吉田 1993; 金水 2006)。

実際, 万葉集には, リ形と同義の意味を持つ「動詞の連用形+アリ」が観察され, この

分析をある程度確証している。

- (5) ま日け長く川に向き立ちありし袖今夜まかむと思はくの良さ(2073)

(5)における「立ちあり」は, 「立つという変化の完了・立った状態の存続」と解釈され, リ形と同じ機能を果たしていると分析できる。万葉集に出現するリ形は, おおむね次のような用法を持っていると分析されている(野村 1994; 仁科 2009)。

- (6) a. 存在様態:
岩代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ(144)
- b. 結果存在:
(主体変化結果存在) 沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも(1641)
(客体変化結果存在) はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代までに(1637)
- c. 維持(主体変化結果の維持動作を表現):大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬りせるかも(235)
- d. 変化結果:
(主体変化結果) 験なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし(238)
(客体変化結果) 月夜良み鳴くほどどぎず見まく欲り我草取れり見む人もがも(1943)
- e. 進行:
(自然) 現象) 春日野に照れる夕日の外のみ君を相見て今そ悔しき(3001)
(思考・感情) 現にか妹が来ませる夢にかも我が迷へる恋の繁きに(2917)
- f. 状態:
住吉の岸に向かへる淡路島あはれと君を言はぬ日はなし
- g. 繰り返し:
秋萩を妻問ふ鹿こそ独り子に子持てりといへ(1790)
- h. パーフェクト:
みやびをと我は聞けるをやど貸さず我を帰せりおそのみやびを(126)

リ形が存在動詞アリをその語源に持っていることから考えると, 当然, 最も早い段階で確立された用法は, 存在様態および結果存在と考えられる。しかし, この議論は, 経験的証拠に裏付けられておらず思弁的な推測にすぎない。

本研究では, 連体修飾節に位置する連体形のリ形を分析することによって, この推測がサポートされることを主張した。

よく知られているように, 万葉集においてリ形はその大部分が連体形として出現する(小路 1980; 吉田 1993; 野村 1994; 釘貫

2003)。小路(1980)を参考に、新編日本文学全集の『万葉集』で訓読を確認した筆者の調査によれば、リ形の全用例 588 例の中で連体形は、424 例であり、約 70% が連体形であった。その中でも、連体修飾の機能を果たしている用例が 356 例あり、半数以上のリ形が体言を修飾するという機能を果たしていた。

連体修飾の機能を果たしていると解釈できるリ形において、ある種の存在様態と解釈することが可能な維持用法や結果存在用法を含めると、存在様態用法は、合計 155 例であり、連体修飾の機能を果たすリ形の約 43% が存在様態関連用法ということを見出すことができた。

本研究で見出したデータは、リ形が存在様態用法から派生したことを強く示唆すると考えられる。

最後にシテイル形式についての研究成果について述べる。

畠山(2017b)は、現代日本語の存在動詞イルの成立史とシテイル形式の文法化が緊密に関連していることを明らかにした。

現代日本語のイルは、典型的な状態動詞の一つであるが、イルの語源を形成するヰルは、状態動詞ではなくむしろ起立状態から着座状態への態勢変化を意味する主体変化動詞であったと考えられている(金水 1983, 2006)。

このことから、イルは、主体変化動詞ヰルではなく、むしろヰルの主体変化結果状態を表現するヰタリから発達してきたと考えられている。

本論文で検討した歴史的なデータは、上代語におけるシテイル形に対応する「テ形+ヲリ」は、「着座状態に代表されるような静止状態維持とオーヴァラップする動作」を意味しており、この状況は、中古語における「テ形+ヰタリ」に引き継がれていることを明らかにした。このヰタリが、中世において存在動詞へと変化していくにつれて、静止状態を維持したままで実行可能な動作以外を「テ形+ヰタリ」が表現できるようになる。

これは、次の例から明らかである。

(7) その人を待つとて、うち掃きなどして
みたり(宇治拾遺物語巻 9-3)

(6) におけるヰタリは静止状態維持と解釈することはできず、シテヰタリにおけるヰタリが静止状態維持を表現する本動詞から純粹にアスペクト形式へと移行していることが観察される。

さらに、中世においてヰタリがイルへと変化する中で、静止状態維持を表現する動詞から純粹に有情物の存在を表現するようになり、「静止状態維持」の意味が剥奪される。これが、近世におけるアスペクト形式としてのシテイル形の確立につながると主張した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

畠山真一(2016). 「シヨル形式の文法化について」*KLS*, **36**, 109-120.

畠山真一(2017a). 「上代語の存在型アスペクト「リ」について - 覚書として - 」『尚綱語文』, **6**, 15-22.

畠山真一(2017b). 「日本語の存在動詞イルの成立とシテイル形式の文法化」『尚綱大学研究紀要人文・社会科学編』, **49**, 29-42.

〔学会発表〕(計 3 件)

畠山真一(2015). 「シヨル形の文法化について」関西言語学会第 40 回大会, 神戸大学

畠山真一(2015). 「静止状態の維持とシテイル形式の文法化」*Morphology and Lexicon* 2015, 東北大学

畠山真一(2016). 「上代語のリ形と西日本方言のシヨル形の文法化について」第 1 回 日本語と近隣言語における文法化ワークショップ, 東北大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畠山真一(Hatakeyama Shinichi)

尚綱大学文化言語学部文化言語学科, 教授

研究者番号: 20361587

(2) 研究分担者

和田礼子(Wada Reiko)

鹿児島大学学内共同教育研究学域学内共同教

育研究学系 留学生センター, 教授
研究者番号: 10336349

(3) 連携研究者
()

研究者番号:

(4) 研究協力者
()